

浄土真実の証

——『歎異抄』第十五条を中心として——

池田 真

親鸞は、仏教の究極的境地である「さとり」を「浄土真実の証」として「証巻」の冒頭「謹んで真実証を顕さば、すなわちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり」と記している。『歎異抄』は、その浄土真実の証を「来生の開覚」とおさえる。この来生の開覚を真宗学徒は、「この世の命が終わってすぐ次の世で浄土に往生し、そこで仏の悟りを開く（『歎異抄事典』・「柏書房・一九九二」一六三頁）という死後の覚りとして了解してきた。すなわち十五条の本文は、親鸞滅後に異義となったさとりの時節を「命終」として受け止めなおしたと了解するものである。命終が真宗であるとして批判した異義は、「煩惱の身をもって今生にさとりをひらく」という今生であった。たしかに親鸞は、現生において往生が定まり（正定聚の位）、命終えて浄土に往生して直ちに大般涅槃（無上覚）をさとると説いている。したがって今生にさとるといふ類の主張は異義になる。しかし、「来生」は「命終」と同一視できる意味内容であろうか。また『歎異抄』は今生に

さとるといふ異義者に対して命終のさとりこそが親鸞の口伝と受け止めていたのであるか。もしそうであれば、命終を語る『歎異抄』は、なぜ命終の開覚と言わなかったのか。あるいは、本文にも使われ同様に死後を意味する、「後世」や「順次生」を開覚と言わないのか。それとも『歎異抄』の時代は来生、後生という言葉を知らなかったのであろうか。もつと端的に言えば浄土真宗は、往生浄土の開覚ではないか。どうして来世の開覚なのか。親鸞の言葉から窺ってみたい。

親鸞は繰り返し来生の語を使っている。いずれも死後ではない。

『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』に言わく……歡喜踊躍せん者、みな我が国に來生せしめ、この願を得ていまし作仏せん。〔定親全一〕一九—二〇頁・筆者省略傍点

『行巻』に引用された「来生」とは、法蔵菩薩が自らの浄土に「歡喜踊躍せん者」を生まれ來たらしめたいという願いを顕わしている。「みな我が国に來生せしめ」たいという浄土

の覚りである。さらに来生という言葉の用例をもう一度挙げたい。

しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し
現わしたまうなり（『証卷』・『前同』一九五頁）

この親鸞自身の解釈が意味する来生は、阿弥陀が如より生まれ来るといふものである。我われの現前に真理の世界から阿弥陀如来が生まれ来たのである。決して死後ではない。さらに『歎異抄』と同時代にあつて、またかつてはその作者とされた如信も来生を死後とみていない。

この文のころは大慈阿弥陀仏を敬礼したてまつるなり。妙教流通のために来生せるものなり。五濁悪時悪世界のなかにして決定してすなわち無上覚をえしめたるなりといえり。（『口伝鈔』十三
条・『真聖全三』二二―二頁）

ここでも同様に阿弥陀如来が真実の教えを流通するために、五濁悪時悪世界の中に来生するというものである。しかもそれは、我われに浄土真実の証である無上覚を獲得させるためであるという。字数の都合で他の用例を控えるが、その意味内容は「あらわれ出る」といふ程の行為であり、またその中心は何処に立って誰が「生」を語るのかである。

衆生の娑婆世界に立って「生」を語れば阿弥陀は、「来」たということになる。また反対に阿弥陀の浄土に立って「生」を語る時は、浄土に衆生が「来」たという意味になる。言い

換えれば、衆生からいえば阿弥陀は、如より、及び真実の教えを広めるために娑婆世界に来生したということになり、阿弥陀からいえば衆生は、娑婆世界から浄土へ来生したということになる。決して来生は、死後ではない。とすれば、『歎異抄』が力説する来生の開覚は、阿弥陀の立場からいうところの「衆生が我が国へ生まれ来た」覚りであり、衆生の立場からいう「阿弥陀が衆生世界へ生まれ来た」覚りということになる。『歎異抄』にかえて考えてみよう。

従来、十五条が問題とすることは、「煩惱具足の身をもつて、すでにさとりをひらくということ」として真言、法華（天台）に対して戒律や智慧をもてない浄土真宗の人が死後にさとりを開くというように解されてきた。それは、聖僧に対して今生において釈尊のごとく説法利益できないであろうという煩惱性の自覚を促し批判することによつて死後の浄土のさとりを主張するものである。したがつて後学によつて、身の自覚を通して覚りの問題が今生か死後かという了解で論争されるようになったと思われる。以下のように考えたい。

今生にさとるといふ人間に対して『歎異抄』は、この身をもつてさとりをひらくとせうろなるひとは、釈尊のごとく、種種の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益せうろにや。これをこそ、今生にさとりをひらく本とはもうしせうらえ。（『定親全四』二八一―九頁）

と、釈尊のように我われが説法利益できるのかと問うている。それは単に釈尊の特徴を列挙してその能力を自身比較するのではなく、さとりうるといふ人間の釈尊觀を問うてゐるのではないか。「釈迦如来かくれましまして二千余年になりたもう正像の二時はおわりにき」との時代にあつては、「種種の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好を具足」することが人間の想像でしかないのである。その意味では、この肉体において、さとりをひらきうるといふ異義には、釈尊を自明の事柄している前提そのものが問われているのではないか。さらに死後にさとりといふ人間心に対しては

おおよそ、今生においては、煩惱悪障を断ぜんこと、きわめてありがたきあいだ、真言・法華を行ずる淨侶、なおもて順次生のさとりをいのる。いかにいわんや、戒行惠解ともになしといへども、弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときこそ、さとりにてはそうらえ。(前同)

死後に予定しているさとりがいかなる意味をもつてゐるのかを問うている。それは今生にある人間があたかも願船に乗り生死の苦海をこえて真実の報土についたかのごとく語る人間の心である。つまり今生には煩惱悪障を断つことのできない淨侶が順次生のさとりをいのる心である。それは人間心情の

延長上に期待する死後の有名無実のさとり確信である。したがつて「歎異抄」は「一切の衆生を利益」しえた時にはじめてさとりを語ることができるといふのである。その意味で今生にさとりという者も死後にさとりという者も共に一切衆生を「利益」した時においてのみ「さとり」といえるのではないか。今生にこの身がある以上、今生も死後も人間心がある以上さとりをかたることはできないといふ目覚めを促しているのである。その意味において、この条が問題にするのは、生前か前後かを問題とするのではなく、仏のさとりを語る人間の心を問うものである。今生にさとりといふ人間心と死後にさとりといふ人間心である。それでは、我われのさとりはどうなるのであるか。

『和讃』にいわく「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ弥陀の心光摂護して、ながく生死をへだてける」(善導讚)とはそうらえば、信心のさだまるときに、ひとたび摂取してすてたまわざれば、六道に輪回すべからず。しかればながく生死をばへだてそうらうぞかし。かくのごとくする(前同)

我われが本当に問題とすべきは、さとることが何時であるかということではなく、この生死のまよいをたちきることではないか。信心決定において弥陀の心光摂護されていく人生ではないか。弥陀の心光摂護とは、単に見守るといふ類ではない。人間が生死のまよいにあることを教え続けるはたらきである。

人間はまよいを知らせられたことよって、まよいを越えることができるのではないか。人間が自身のまよいを忘れた時、まよいではないか。何のまよいか。生死出離できる、仏になるというまよいである。親鸞は死後にさとることを力説するのではない。どこまでも「浄土真宗」には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならぬさうろうぞ」というように、今生に本願を信じてのことである。決して「かの土にしてさとりをばひらく」ことを信じてのではない。親鸞にとつて浄土とは「かの土へまいるべきなり(第九条)」あるいは、「かの土にしてさとりをばひらくとならぬさうろう」という自覚であり、人間が自らさとりを開くといえない仏の境涯なのである。「来生我国」と願う本願文を親鸞は、

これは如来の還相回向の御ちかいなり。これは他力の還相回向なれば、自利・利他ともに行者の願案にあらず、法蔵菩薩の誓願なり。(如来二種回向文)・『定親全三』二二〇頁

と尋ねとつている。つまり浄土に生まれること、浄土真実の証とは、今生、死後のさとりは人間が要求するものではなく、どこまでも法蔵菩薩の誓願なのである。『歎異抄』が浄土真実の証を来生の開覚と語ったことは、阿弥陀の誓願によって願われる境涯である。加えて往生浄土の開覚といわなかったことは、実は浄土に「私」が往生できうるといふ人間の自力心が内在するからではないか。何故なら「生まれ来た」とは、

浄土真実の証(池田)

すでに浄土に居る主体の言葉だからである。したがって来生とはどこまでも我われがさとりを語ることを許さない自覚であり、阿弥陀が我われを真実の世界へ招喚する誓いである。

「来」は浄土へきたらしむという、これすなわち若不生者のちかいをあらわす御のりなり。穢土をすてて真実報土にきたらしむとなり、すなわち他力をあらわす御ことなり。また「来」はかえるという。かえるという願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを、法性のみやこへかえるともうすなり。(唯信鈔文意)・『定親全三』一九五―六〇頁

来生とは、阿弥陀にとつて衆生を浄土へ招喚する「きたらしむる」という他力の誓いであり、また衆生にとつては、本願を真実の抛り所とした「かえる」という自然のさとり(証)なのである。我われにとつて真実証とは、「必ず大涅槃にいたる」道程を阿弥陀の願心に聞き開き人間が本当に「かえる」べき世界が決定したことである。

(キーワード) 来生の開覚、歎異抄、親鸞

(大谷大学非常勤講師)